

東京藝術大学美学芸術論研究会 山下祐樹

(熊谷市立江南文化財センター)

ドストエフスキイの生涯

ドストエフスキイ：

Фёдор Михайлович Достоевский

Fyodor Mihaylovich Dostoevskiy (1821—1881)



(左：ヴァシリー・グリゴリエヴィチ・ペロフ画)

ロシアの小説家。1821年10月30日（新暦11月11日）モスクワのマリヤ貧民救済病院の医師の次男に生まれ、教育熱心な父と、商家の出身で敬虔なキリスト教徒であった母のもとで育った。幼時から都会的環境に親しむ機会が多く、このことはロシアの都市文学の先駆者としての彼の特色を決定づけたとされる。トルstoiとともに19世紀ロシア文学を代表する世界的巨匠と並び称される。「魂のリアリズム」と呼ばれる独自の方法で人間の内面を追求、近代小説に新しい可能性を開いた。農奴制的旧秩序が資本主義的関係に変化する過渡期のロシアで、自身が時代の矛盾に引き裂かれながら、その引き裂かれる自己の存在を全的に作品世界に描写した彼の文学は、20世紀の思想・文学に大きな影響を与えていた。晩年に、自身の集大成的作品『カラマーゾフの兄弟』を脱稿した数ヵ月後の1881年1月28日に亡くなった。

年譜

1821年		10月30日、モスクワ、マリヤ施療院にて生まれる。父ミハイル・アンドレイ・ヴィチ、母マリヤ・ヨードロヴナの次男。両親は1819年結婚。父は同病院の医師、軍医。兄ミハイルは前年1820年生。妹弟としてワルワーラ、アンドレイ、ヴェーラ、ニコライ、アレクサンドラ。
1822年	1歳	妹ワルワーラ生。
1826年	5歳	弟アンドレイ生。彼の書いた回想は作家の幼少年期を知る資料として貴重。

1829年	8歳	妹ヴェーラ生。彼女の長女がソフィヤ（ソニヤ）・イワーノワ。創作に関わる重要な手紙を多く書いた姪である。
1831年	10歳	父がトゥーラ県ダロヴォーエ、セルマーシャに領地を購入。以後夏をここで過ごす。『百姓マレイ』の経験。シラーの『群盗』の俳優の演技に感動。第二コライ生。
1833年	12歳	兄とドラシューソフの塾に通う。寄宿中学入学準備のため。
1834年	13歳	兄とモスクワの寄宿中学校に入学。
1835年	14歳	妹アレクサンドラ生。
1836年	15歳	教師の感化によりプーシキンに熱中。母の肺結核悪化。
1837年	16歳	1月、プーシキンの死に衝撃。2月、母結核で死去。 5月、兄とペテルブルクのコストマーロフの予備校に入る。工科学校入学準備のため。 7月、父、退職し田舎の領地へ移る。
1838年	17歳	1月、陸軍工兵士官学校（工科学校）入学。兄は身体検査で不合格。 6月、兄はレヴェリの工兵团に入るため出発。文学に熱中。10月、進級試験落第。
1839年	18歳	6月、父が殺害される（諸説あり）。
1840年	19歳	11月、下士官に任命さる。翌月士官候補生と改称。
1841年	20歳	1月、現存しない劇『マリヤ・シュチュアルト』『ボリス・ゴドウノフ』を兄の壮行会で朗読。 8月、野戦工兵少尉補に昇進。
1842年	21歳	1月、兄結婚。8月、少尉に昇進。
1843年	22歳	8月工兵士官学校を卒業。ペテルブルク工兵局製図課勤務。 バルザック『ウジェニー・グランデ』の翻訳開始。
1844年	23歳	6-7月『ウジェニー・グランデ』の翻訳（抄訳）発表。9月、『貧しき人々』執筆開始。 10月、中尉に昇進、退官。
1845年	24歳	5月『貧しき人々』がネクラーソフ、ベリンスキイ等に激賞される。 『分身』執筆。11月、ツルゲーネフを知る。パナーエフ家のサロンに参加。
1846年	25歳	1月『貧しき人々』を「ペテルブルグ文集」に発表。春、ペトラシェフスキイを知る。2月『分身』、10月『プロハルチン氏』発表。
1847年	26歳	年初、ベリンスキイと不仲になる。ペトラシェフスキイの会合に参加。

		1月『九通の手紙にもらられた小説』、4-6月『ペテルブルグ年代記』、10-11月『家主の妻』発表。		8月-10月、第2回国外旅行。スースロワとの関係が続く。9月、バーデンバーデンで賭博。ツルゲーネフに会い、彼が「時代」のために書いた『幻』について説明。
1848年	27歳	1月『他人の妻』、2月『弱い心』、『ポルズンコフ』、4月『世なれた男の話』、9月『クリスマス・ツリーと結婚式』、12月『白夜』、『嫉妬ぶかい夫』		3月、雑誌「世紀」を発刊。4月15日、妻マリヤ死亡。7月10日、兄ミハイル死亡。巨額の負債が作家にのしかかる。
1849年	28歳	4月15日、ペトラシェフスキイの会合でベリンスキイのゴーゴリ宛書簡の朗読。4月23日逮捕、ペトロパブロフスク要塞に監禁。5月予審取調べ。9月公判開始。11月死刑判決。12月22日セミヨーノフ練兵場で死刑直前に恩赦。12月24日、シベリヤへ向け出発。1-2月、5月『ネートチカ・ネズワーノワ』発表。『小英雄』を監禁中に執筆。		4月、アンナ・クルコフスカヤに求婚、拒絶される。彼女は有名な数学者ソフィヤ・コワレフスカヤ(クルコフスカヤは旧姓)の姉。6月、資金難により「世紀」廃刊。7月-10月、国外旅行。ヴィスバーデンで賭博。9月、『罪と罰』の構想をカトコフに売り込む。『鰐』の原本、発表。出版人ステロフスキイと契約、版権売り渡し、3巻全集を翌年にかけて出版。また新作長篇を66年中に執筆を約束、違約すれば将来の重版権を失うとされた。
1850年	29歳	1月9日、トボリスク到着。十二月党員の妻たちから福音書を貰う。1月23日、オムスク監獄に到着。1854年2月まで服役。		10月、速記者アンナ・スニートキナに『賭博者』を口述。11月結婚申し込む。1-12月『罪と罰』を発表。
1854年	33歳	3月、セミパラチンスク守備隊に編入。イサーイフとその妻マリヤを知る。彼女に恋愛感情抱く。		2月、アンナ・スニートキナと結婚。4月、国外旅行へ出る(1871年まで)。ドレスデンで絵画鑑賞。夏にバーデンでツルゲーネフと衝突。ジュネーブへ。バクーニンらによる平和大会を傍聴。『白痴』執筆開始。
1855年	34歳	3月、イサーイフ一家クズネツクへ移転。8月イサーイフ死去。『死の家の記録』執筆開始。		2月長女ソフィヤ誕生(5月死亡)。5月ヴェーヴェ、9月ミラノ、11月フィレンツエ。1-12月『白痴』発表。
1856年	35歳	兵役免除、出版許可の請願書提出。10月、下士官へ昇進。		ボローニャ、ヴェネティア、プラハ経由で8月、ドレスデン到着。
1857年	36歳	2月、クズネツクでマリヤ・ドミートリエヴナ・イサーイフと結婚。4月士族の称号回復。8月『小英雄』発表。		9月、次女リュボフィ誕生。長じて仏へ渡りエーメと改名、父の回想を書いた。
1858年	37歳	1月、軍務免除とモスクワ居住の請願書提出。		1870年 49歳 『悪霊』執筆開始。1-2月『永遠の夫』
1859年	38歳	3月少尉として免官。トヴェーリ居住を命じられ7月出発。12月ペテルブルクへ戻る。3月『伯父様の夢』、11-12月『ステパンチコヴォ村とその住人』		1871年 50歳 7月帰国、長男フョードル誕生。1-11月『悪霊』発表。
1860年	39歳	9月『死の家の記録』を「ロシヤ世界」に発表開始。		1872年 51歳 4-5月、ペロフが肖像画を描く。5-9月、スタラーヤ・ルッサ滞在。12月、雑誌「市民」編集長就任。11-12月『悪霊』第3篇発表。
1861年	40歳	1月、兄ミハイルとの共同編集「時代」発刊。1-7月『虐げられた人々』同誌に発表。また『死の家の記録』も同誌に転載して発表。		1873年 52歳 1月「市民」創刊、『作家の日記』を同誌に掲載。
1862年	41歳	6月-9月、初の外国旅行、パリ、ロンドン、ドイツ、スイス、イタリア訪問。7月、ロンドンでゲルツェン及びバクーニンと会う。年末アポーリナリヤ・スースロワと交際。1-11月『死の家の記録』の第2部発表。ツルゲーネフの『父子』絶賛。(書簡現存せず)		4月、「市民」編集長辞任。5-6月、スタラーヤ・ルッサに住む。6-7月、エムスに。
1863年	42歳	5月、ストラーホフのポーランド問題を扱った論文により「時代」誌発禁。		5-7月、エムス。8月、次男アレクセイ誕生。9月、ペテルブルクへ戻る。雑誌「作家の日記」刊行準備。1-12月『未成年』発表。

1876年	55歳	1月より雑誌「作家の日記」刊行開始。
1877年	56歳	7月、ダロヴォーエ村訪問。12月、アカデミー通信会員に選出。
1878年	57歳	5月、癲癇で次男アレクセイ急死。カラマーゾフでゾシマ長老に語る子供を亡くした話参照。
1879年	58歳	6月、ロンドン国際文学者会議で名誉会員に推される。7-9月、エムスで療養。1-11月『カラマーゾフの兄弟』発表。
1880年	59歳	5月、プーシキン記念祭に参加、6月8日、講演。8月より「作家の日記」復刊。1-11月、残りの『カラマーゾフの兄弟』発表。
1881年	59歳	1月26日、出血、意識を失う。1月28日死去。2月1日アレクサンドル・ネフスキイ寺院で葬儀。

作品解説

『罪と罰』

Преступление и наказание

Prestuplenie i nakazanie

ドストエフスキイの長編小説。1866年『ロシア報知』誌に発表。世界文学の最高傑作の一つ。近代都市の様相を帶び、作中に登場する小官吏マルメラードフのいうような「どこへも行き場のない」人々にあふれるペテルブルグの裏町が舞台である。

貧乏学生ラスコーリニコフは病的な思索のなかで、ナポレオン的な選ばれた強者は人類のために社会の道徳律を踏み越える権利をもつとの結論に達し、金貸しの老婆を殺すことでこの思想を実践に移す。だがこの行為は、思いがけず罪の意識におびえ「人類との断絶感」に苦しむ惨めな自分を発見させる。敏腕の予審判事ポルフィリーの嫌疑には論理的に立ち向かいながらも、罪の重荷に耐えきれなくなった彼の心情は、自己犠牲と苦悩に徹して生きる「聖なる娼婦」ソーニャを罪の告白の相手に選び、また情欲を絶対化する背徳者スピドリガイロフの謎めいた生と死に自己の理論の醜悪な投影をみて、ついに自首を決意し、シベリアに送られる。

作者はキリスト教的信仰の立場から西欧合理主義、革命思想を断罪しようとしたかに見えるが、作品はそうした意図を超えて、時代の閉塞状況のなかでくすぶる人間回復への願望を訴えるヒューマニズムの書となつておらず、また「魂のリアリズム」とよばれるこの作家独自の方法は、犯罪を媒介に、人間存在の根本への問い合わせを含んでいる。

全編が精密な「からくり装置」にも例えられる構造をもち、神話、フォークロア、古今の文学が文体を通して一つの作品に反映される特色は、この作品を近代小説形式の最高の達成とも評価されている。

【参考出典：江川卓解説、『江川卓訳『罪と罰』（『世界文学全集37』1977・学習研究社）▽米川正夫訳『罪と罰』（新潮文庫）▽江川卓著『謎とき「罪と罰」』（1986・新潮社）】

『カラマーゾフの兄弟』

Братья Карамазовы
Brat'ya Karamazov

ドストエフスキイ最後の長編小説。1879~80年『ロシア報知』に発表。生涯を通じて作者を悩ませた思想的、宗教的問題、人間の本質についての思索を集大成した世界的傑作。物欲と淫蕩の権化フョードルを父にもつカラマーゾフ家の3人兄弟（ロシア的な情熱に生きる長男ドミトリー、無神論者で知識的な次男イワン、同胞愛の教えを説くゾシマ長老に傾倒する三男アリョーシャ）、父が白痴女に生ませた下男のスメルジャコフが中心人物で、小説の外面的筋は、父親フョードルの殺害をめぐる心理的葛藤を軸に、推理小説を思わせる緊密な構成で展開される。父親殺しの嫌疑は、彼と美女グルーシェンカを張り合っていたドミトリーにかかるが、実はこれは、てんかんをアリバイに利用したスメルジャコフの犯行であり、しかもイワンの思想的感化と間接の教唆によるものであった。しかし真犯人は自殺し、陪審員制の裁判はドミトリーを断罪する。

小説の内面的テーマは、「神がなければすべてが許される」という哲学で、スメルジャコフにも影響を与えたイワンと、僧院のゾシマ長老との間に、アリョーシャのけがれない魂（ロシアの未来を象徴する）を奪い合う形で繰り広げられる思想的な格闘である。作者の共感は、自ら明言するように、ゾシマ長老の側に寄せられるが、いわれない幼児の苦痛を盾にとって、神のつくった世界の不合理をつき、この不合理がある限り、未来の「永久調和」をも認めない、とするイワンの反論は、はるかに迫力をもつ。特に、中世紀に地上に再来したキリストがカトリックの教權によって拒否されることを語った、イワンの作にかかる劇詩『大審問官』は、ドストエフスキイ文学の精髓であり、現代における権力と自由の問題を照明する予言的響きをもつ。被差別兄弟として登場するスメルジャコフに託されたロシア被圧迫民衆の怨念も、革命の問題に裏から着目する意図を含む。

作者はこの長編の続編を書き、僧院を出た13年後のアリョーシャの運命を描くはずであったが、それは果たさなかった。作者の残したわずかなヒントから、「現代のキリスト」に擬されたアリョーシャが、やがて「ロシア民衆の父」たる皇帝を暗殺し、十字架にかけられる構想が推測されている。その後、1910年にモスクワ芸術座によって劇化されたほか、旧ソ連、アメリカで映画化もされている。

【参考出典：江川卓解説、『江川卓訳『世界文学全集19カラマーゾフの兄弟』（1975・集英社）▽米川正夫訳『カラマーゾフの兄弟』全4冊（岩波文庫）▽A・L・ウォルインスキイ著、川崎浄訳『カラマーゾフの王国』（1974・みすず書房）】

『貧しき人々』

Бедные люди Bednelyudi

ドストエフスキイの処女作とされる中編小説。1846年『ペテルブルグ文集』に発表。物語は、ペテルブルグの裏町に住む50歳に近い小官吏ジェーブシキンと薄幸の娘ワルワーラとの往復書簡の形で進められる。二つの善良な魂の間に芽生えた恋は実らずに終わるが、作者はこの不幸な恋を語りながら貧しく無力な人々の孤独と屈辱を訴え、人生の意義を追求する。この原稿を読んで感激したグリゴロービチとネクラーソフが早朝に作者をたたき起こし、「新しいゴーゴリの出現」を祝福し、彼をベリンスキイに紹介

したことが、24歳の無名作家を一躍文壇の寵児と押し上げる契機となった。

【参考出典：江川卓解説、『原久一郎訳『貧しき人々』（岩波文庫）▽木村浩訳『貧しき人びと』（新潮文庫）】

『死の家の記録』

Записки из Мёртвого дома

Zapiski iz Myortvogo doma

ドストエフスキイの長編小説。1861～62年、雑誌『時代（ブレーミヤ）』に発表。1850年から4年間の作者自身のオムスク監獄での体験に基づく記録文学風の作品。抑えた筆致で帝政ロシアの監獄の実情をリアルに伝え、囚人の集団入浴の場面など「ダンテ的」（ツルゲーネフ）と評される迫力をもつ。囚人たちのさまざまな性格、心理、過去がみごとに描き分けられ、その後の小説の主人公たちの原型をみる思いもある。作者は「死の家」の住人たちを「むだに滅び去ったロシアの眞の民衆」とみて、その再発見を契機に自身の思想的信念の更生を目指そうとする。

参考出典：江川卓解説、『工藤精一郎訳『死の家の記録』（新潮文庫）』

『地下室の手記』

Записки из подполья

Zapiski iz podpol'ya

ドストエフスキイの中編小説。1864年、雑誌『エポーハ』に発表。近代人の意識の問題を極限まで突き詰めることで、ドストエフスキイ独自の文学方法をみいだした作品。セルヌイシェフスキイの小説『なにをなすべきか』

（1863）への反論の意味をもち、青年時代の熱中の対象であった空想的社会主義の矛盾と不条理に根ざした実存と生の哲学が対置されている。全体は二部に分かれ、第一部では、自ら「地下室の住人」を名のる中年の元小官吏が、「意識は病氣である」「歯痛にだって快楽はある」「ニニが四は死だ」と、醜悪な存在状況たる「地下室」に居直った「逆説家」の思弁を展開する。第二部はこの主人公の回想であり、「生きた生活」、人間的連帶を求めながら、現実には娼婦リーザの精神を手ひどく傷つけるだけに終わる「エゴイスト」の業の深さが示される。

参考出典：江川卓解説『江川卓訳『地下室の手記』（新潮文庫）▽米川正夫訳『地下生活者の手記』（『ドストエフスキイ全集5』所収・1970・河出書房新社）』

『白痴』

Идиот Idiot

ドストエフスキイの長編小説。1868年発表。主人公ムイシキン公爵はキリスト的な「ポジティブに美しい人」として構想される。「白痴」とよばれるほどの無垢な純粋さをもつ公爵は療養先のスイスの病院からペテルブルグに戻り、欲望の権化である商人口ゴージン、エパンチン将軍家の誇り高い令嬢アグラーヤ、更に小説の女主人公であり、不幸と凌辱のなかにあっても傲慢な悲劇的美をもち続けるナスター・シャ、自殺志願の青年イッポリートらの織り成す人間情熱のドラマに巻き込まれる。副人物レベジェフによる黙示録解釈、ロゴージン家にまつわる去勢派信徒の影などが特異な雰囲気を醸し、主人公には作者の持病であるてんかんのアウラ体験が託される。しかし人々の間に和解と調和をもたらすべき公爵の愛と哀れみの精神も現実世界の荒れ狂う渦の前には無力であり、ロゴージンはナスター・シャを殺し、公爵も再びスイスに帰るという経過をたどる。

【参考出典：江川卓解説、『木村浩訳『白痴1・2』（『ドストエフスキイ全集9・10』1978、79・新潮社）▽米川正夫訳『白痴』全四巻（岩波文庫）▽木村浩訳『白痴』上下（新潮文庫）】

『悪霊』

Бесы Bes

ドストエフスキイの長編小説。1871～1872年に『ロシア報知』に発表。聖書に、悪霊（悪鬼）に憑かれておぼれ死ぬ豚の群れの記述があるが、この作品は無神論革命思想をその「悪霊」に見立て、それに憑かれた人々の破滅を描こうとしたもので、実在のアナキスト革命家ネチャーエフ（小説ではピョートル・ベルホベンスキー）が転向者イワノフ（シャートフ）を惨殺したリンチ事件に取材している。小説はこの事件を軸に、父の世代の自由思想家ステパン、人神論者キリーロフ、民族主義者シャートフ、專制社会主義者シガリヨフら、錯雜した登場人物の重厚な思想的ドラマとして展開するが、「眞の主人公」はその背後にある謎めいた存在スタブローギンで、彼については別に「告白」の章も残され、これは「ドストエフスキイ的」とも形容し得る人物像として知られる。

【参考出典：江川卓解説、『江川卓訳『悪霊』全二冊（新潮文庫）】

【参考文献・資料（年譜、解説ほか）】

『新潮社刊・決定版ドストエフスキイ全集 全27巻・別巻1』 江川卓・原卓也・小泉猛・工藤精一郎・木村浩・小笠原豊樹・水野忠夫・千種堅・工藤幸雄・川端香男里・染谷茂分担訳。1978～1980年刊。新谷敬三郎・井桁貞義・国松夏紀・斎藤敏雄・佐々木寛・沢田和彦・柳富子「日本におけるドストエフスキイ翻訳・紹介文献—明治・大正期雑誌編」（『比較文学年誌』第17号 昭和56年3月）、井桁貞義・本間暁編『ドストエフスキイ文献年表・解説』（ドストエフスキイ文献集成 第22巻（1996年7月、大空社）

「特別公開絵画」画家紹介

ボリス・ヤコブレヴィッヂ・リアウゾフ

Борис Яковлевич Ряузов

Boris Yakovlevich Ryauzov (1919-1994)



ソビエトおよびロシアの風景画家。ヤコブレヴィッヂ・リアウゾフは1919年7月1日、アストラハン州ビリュチャ・コサの村で生まれた。1939年から1941年まで、オムスクアートカレッジで学ぶ。1942年以来、RSFSRの芸術家連合のメンバー。RSFSRの人民芸術家（1978年）、ソ連芸術アカデミーの正会員（1988年）。日本国内でも展覧会を開催するなど国際的な活動も進めた1994年8月13日に亡くなった。